



amphibian ark
2008 YEAR OF THE FROG

両生類の箱舟計画

2008 国際カエル年

2008年は、**カエル**にとって記念すべき年だった。そう、今年は『**国際カエル年**』だったのである。現在、両生類は世界的に急速に減少していて、全種の3分の1から2分の1が絶滅の危機に瀕している。その緊急対応策として、国際自然保護連合（IUCN）と世界動物園水族館協会（WAZA）が、飼育下で繁殖させようと立ち上げたのが「**両生類の箱舟計画**（Amphibian Ark Project）」なのである。この計画には「少なくとも5000万ドル（50億円）」が必要とされ、その理解と協力を得るためのキャンペーンとして、「**2008 Year of the Frog**」が提唱されたのである。日本でも多くの動物園や水族館で、国際カエル年のイベントが行われた模様である。



そこで、今回は「**栃木両生爬虫類の会**」代表である県立博物館の**林 光武**（はやし てるたけ）さんに両生類にまつわるお話を伺った。林さんは、京都大学理学部でイモリの研究をされていた。

質問1 **大学で両生類(イモリ)を研究しようと思ったのはなぜですか。**

大学入学後、**野生生物研究会**というサークルに入りました。そこで、両生爬虫類に詳しい先輩（現在は、琉球大の教授）に出会い、**八重山諸島**の両生爬虫類調査旅行に連れて行ってもらいました。**約2ヵ月間**、その先輩と1年生4人でいろいろな島を巡って両生爬虫類を採集し分布調査をしました。その頃はまだどの島にどんな両生爬虫類が分布しているのかについての情報が少なく、大学生の2ヵ月の調査でも**新発見**がいくつかありました。

調査旅行中に両生類の魅力に取りつかれた私は、図鑑に出ていた**“サンショウウオ”**のことがどうしても気になり、「サンショウウオについて調べたい」と松井正文先生の研究室を訪ねました。先生から「サンショウウオの生態を調べるのは難しいから、イモリを調べたら」と言われ、**イモリの生態調査**を大学3年生の時に始めました。山の中の湿原で、イモリを捕まえて胃内容物や生殖腺の状態を調べたり、マーキングして放したり、**わくわくする体験**でした。これが私の両生類研究の原点です。



質問2 **これまで、両生類の調査研究をしていて、忘れられない思い出などはありますか。**

大学院に進んでから、日本各地のイモリの体の形や遺伝子の違いを調べるため、日本中（イモリがいない北海道を除く）を主に**オートバイ**で旅したことです。別に物乞いをしていただけではないのですが、日本各地の多くの人（**100人を超えることは確実**）から食べ物いただきました。見ず知らずの私を家に泊めて下さった方もいます。もちろんイモリ捕りを手伝って下さった方もいます。たくさんの人の温かい気持ちに何度も涙ぐみそうになりました。

質問3 **「国際カエル年」についてどう思われますか。**

世界各地で両生類の生息が危機的状況にあるということを多くの人に知ってもらうための取り組みのひとつとして、**がんばっているな**と思います。一方、深刻な事態はカエル年が過ぎても終わるわけではないので、その問題意識を一過性のものにせず、身近な問題として定着させることが大切です。そのような活動を地道に続けるのが**博物館にいる自分の役割**だと思っています。

☆林さん、ご協力ありがとうございました☆

（一番上の写真：林さん撮影）3月、まだ雪に覆われた山の溪流に出てきたナガレタゴガエル